

2017年1月26日（木）

藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第190次） 記者発表資料

独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所 都城発掘調査部

- *現地説明会を1月28日（土）13時30分より実施します（小雨決行）。
- *駐車場はありません。

発掘調査地：奈良県橿原市高殿町

調査期間：2016年10月4日～継続中

調査面積：480㎡（南北32m×東西15m）

※このうち、96㎡は第117次調査（2001・2002年度）と重複

【 概 要 】

藤原宮大極殿院東門および東面回廊を発掘調査し、東門の南端の礎石据付穴を確認した。その結果、東門の規模は桁行7間×梁行2間と推定できる。また、東面回廊の礎石の根石、基壇外装据付溝と雨落溝、内庭の礫敷広場などを検出し、大極殿院東門と回廊の構造と造営過程を明らかにするうえで重要な知見を得た。

1. 調査の経緯と目的

大極殿院は、藤原宮の中心部に位置し、周囲を回廊で囲まれた東西約120m、南北約170mの区画である。その中央には、即位や元日朝賀などの儀式の際に天皇が出御する大極殿がある。

藤原宮における大極殿院の調査は、戦前に日本古文化研究所がおこなった、大極殿、大極殿院南門と回廊の発掘調査を嚆矢とする。その後、奈良文化財研究所が、1977年度に大極殿院の整備に伴って大極殿北方（藤原宮第20次）および大極殿院西門（同第21次）の調査をおこなった。近年では、大極殿院の様相解明を目的として、回廊ならびに内庭部の調査を継続的に進めている。このうち、回廊については、2001・2002年度に東門および東面回廊（飛鳥藤原第

117次)、2007年度に南門(同第148次)、2009年度に南面回廊(同第160次)の調査を実施してきた。こうした発掘調査の結果、大極殿院回廊は礎石建ちで瓦葺きの複廊であることが明らかとなった。また、回廊の各辺にひとつずつ、合計4つの門を設けていると考えられるようになった。しかし、北門・東門・西門の規模や構造および門と回廊との取り付けなどの詳細は不明な点が多く、大きな課題であった。

そこで、今年度は、東門の規模を確定し、東面回廊との接続部の構造を把握することを目的として、東門と東面回廊にあたる480㎡を発掘調査した。このうち、96㎡は第117次調査区(2001・2002年度)と重複する。

2. 調査の成果

1) 藤原宮期の遺構

【東門～礎石建ちの七間門～】

第117次調査では桁行6間分、梁行2間分を確認しており、今回あらたに東門の南端にあたる3基の礎石据付穴を検出した。基壇土は削平されており、いずれも礎石は抜き取られていたが、礎石を据え付けるための穴や根石(直径20~40cmの川原石)をわずかながら確認できた。削平が大きく及んでおり礎石据付穴の遺存状況が良くないため、正確な規模や柱間寸法を計測することは難しいが、これまでの調査成果も考慮すれば、東門は桁行7間×梁行2間で、柱間寸法は桁行4.2m(14尺)、梁行3.3m(11尺)とすることができる。

【東面回廊～梁行2間の複廊～】

東面回廊 基壇土は削平されていたが、あらたに16箇所の柱位置を確認できた。いずれも礎石は抜き取られており、礎石据付穴や根石、あるいは抜き穴を検出した。遺存状況が良くないため、礎石据付穴の規模は不明である。柱間寸法は、既往の調査成果と同じく、桁行4.2m(14尺)×梁行3.0m(10尺)である。ただし、その北端、すなわち東門との接続部にあたる2間分は、桁行の柱間寸法がやや狭くなる。このうち、回廊棟通り北端の礎石据付穴では、埋土に拳大の礫(直径5~10cm)を充填している状況が認められる。

これまでの調査成果を踏まえれば、梁行2間の複廊である東面回廊は、東門の南では桁行15間をかぞえ、南面回廊の北側柱列心から東門南端の柱列心までの距離は約59mとなる。桁行の柱間寸法は、4.2m(14尺)を基本とし、東門との接続部にあたる2間分だけは狭くなることが明らかとなった。

なお、礎石の周囲で、一辺40cm程度の小穴をあらたに15基検出した。回廊の造営時、あるいは解体時の足場穴であろう。

基壇外装 内庭側にあたる基壇内側(西側)では基壇外装の据付溝と抜き溝を良好な状態で

検出した。据付溝は黄色砂を埋土とし、幅 35cm、深さ 5 cm で、約 16mにわたって確認できた。抜取溝は灰色粘質土を埋土とし、幅 60cm、深さ 5 cm で、約 16.5m分を検出した。抜取溝には凝灰岩の破片がわずかに含まれ、内側の基壇外装は凝灰岩であることを追認した。

いっぽう、基壇外側（東側）では基壇外装の痕跡を確認できなかったが、周辺から人頭大の花崗岩（直径 20～40cm）が多く出土していることから、これまでの調査成果のとおり、東の基壇外側では花崗岩を基壇化粧に使用していたと考えられる。

雨落溝 東雨落溝は、あらたに長さ約 18m分を検出した。素掘りの溝で、溝内には砂が堆積していた。幅 45cm 程度、深さ 10cm。西雨落溝は、幅 70cm 程度の素掘りの溝。溝内には砂が堆積しており、その上を大極殿院内庭の礫敷が覆う。なお、東西雨落溝の心々間距離は約 9.9m である。

【礫 敷～内庭の舗装～】

これまでの調査で、大極殿院内庭は礫敷の広場であったことが判明している。今回の調査でも、回廊西の内庭部では、拳大の礫（直径 5～10cm）を敷いた状況を検出した。

2) 藤原宮造営期の遺構

整地 東門と東面回廊にあたる箇所には、暗褐色土を主体として橙褐色粘土を互層状に積みながら整地している。その後、後述するように排水目的で両基壇縁付近にそれぞれ 1 条の南北溝を掘削し、それを埋め立てる際には、基壇外側では凝灰岩の粉末・白色粘土・瓦片を層の境に挟みながら、暗褐色土・黄褐色粘土・礫混灰色砂などで互層状に整地する。いっぽう、基壇内側ではおもに黄色砂の整地土がみられ、間に凝灰岩の粉末を敷いていた状況も認められる。

南北溝 調査区の東西両端で、回廊の基壇縁付近にそれぞれ 1 条の南北溝を検出した。これまでの調査成果も参照すれば、幅 100cm、深さ 40cm 程度の南北溝であり、宮造営時の排水を目的とすると考えられる。また、南北溝の埋土の層境には凝灰岩の粉末や瓦片を敷いており、人為的に丁寧に埋めていた状況が認められる。

3. 出土遺物

藤原宮期の瓦が多量に出土した。このほか、凝灰岩（奈良県二上山産、兵庫県加古川西岸産）の破片が出土している。

4. まとめ

1) 大極殿院東門の規模が確定した

大極殿院東門の南端を確認した。第 117 次調査の成果を踏まえると、大極殿院東門は、桁行 7 間×梁行 2 間の礎石建総柱建物で、柱間寸法は、桁行が 4.2m (14 尺)、梁行が 3.3m (11 尺) と考えられる。

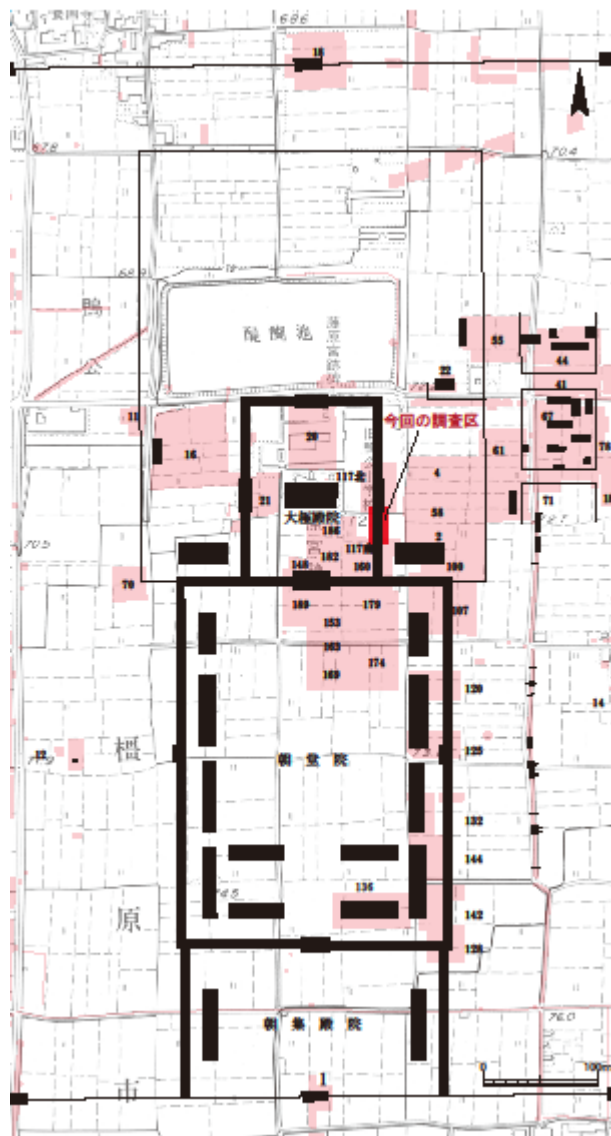
2) 大極殿院東面回廊の構造が判明した

今回の発掘調査で、大極殿院東面回廊は、東門を含めてその南側をほぼすべて発掘調査したこととなる。その結果、東面回廊は梁行 2 間 (6.0m : 20 尺) の複廊で、東門より南には桁行 15 間 (総長約 59m) があることがわかった。桁行の柱間寸法は 4.2m (14 尺) を基本とし、東門との接続部にあたる 2 間分のみ狭くなる。

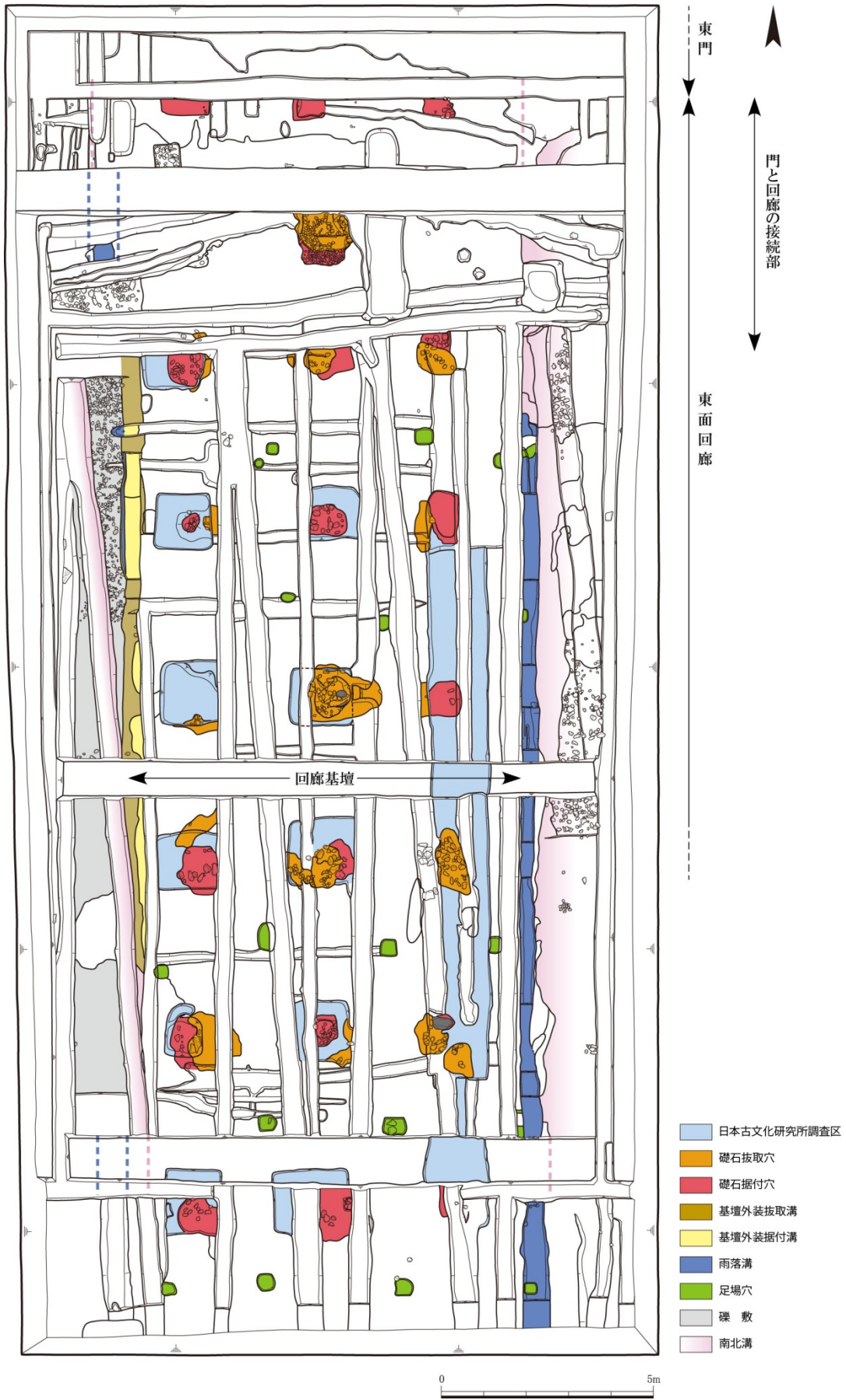
また、東西雨落溝とともに内側の基壇外装据付溝を良好な状態で検出した。東西雨落溝の心々間距離は約 9.9m であり、外側の基壇外装据付溝が東西対称の位置にあるとすれば、基壇の幅は約 9.3m となる。

3) 大極殿院東面回廊の造営状況がより一層明らかとなった

東面回廊の造営過程では、回廊部分に整地を施した後に、その両基壇縁付近に南北溝を掘ることで、造営時の排水を工夫していた状況を再確認した。さらに、この南北溝を埋め立てる際には、凝灰岩の粉末や瓦片を層境に敷きながら、互層状に丁寧に整地している状況が明らかとなった。こうした整地の後に雨落溝を掘削し、内側では最終的に西雨落溝を礫敷で覆ったと考えられる。



調査区位置図



遺構平面図